

ポスト・オスマン期から世界大戦期に至る パリ都市空間形成と近代建築の展開

Development of Modern Architecture through the Urbanisme in Paris during the period of
Post-Haussmann and the World Wars.

松本 裕(MATSUMOTO Yutaka)

本研究の目的は、歴史都市の最大の特徴は「都市組織(tissu urbain)」の重層性にあるとの仮説のもと、パリ(Paris)をフィールドとして、都市組織の織り重なるの具合を具体的な場所に即して解明することである。歴史都市パリの再開発を、こうした都市組織の重層過程に着目して分析することは、わが国の今後の都市像を刷新的に計画していく際に貴重な示唆を与えてくれるものと期待する。

パリは、ヨーロッパの諸都市に典型的な発展過程を経ており、市壁の解体・再構築を通じた市域拡張と都市内部での数々の改造を通じて、幾重にも織重なる特徴的な都市組織が形成されてきた。

2011(H23)年度は、都市内改造計画に焦点を当てた。特に、中世都市から近代都市への移行において重要な役割を果たしたナポレオン3世とセーヌ県知事バロン・オスマンによるパリ大改造計画に関して、以下のような2期の事業に分けて、現地調査、資料収集ならびにそれらの分析を実施した:

期間[1]オスマン在任中(1853-1870)に実施された開設道路

期間[2]「ポスト・オスマン」期(1870-1914と定義)に継続実施された開設道路

研究対象地区として選定したのは、都市組織の様々な計画レベルでの重層が認められるパリ市第II区のボンヌ・ヌーヴェル(Bonne Nouvelle)地区とマイユ(Mail)地区である。2010(H22)年度以降、GIS(地理情報システム)を用いて両地区の都市組織図を整備してきた。2011(H23)年度は、それらの都市組織図を時代ごとに比較した。そして、当該地区で展開された局所的な変遷を抽出し、それらをより広範な都市組織との関係において位置づけた。そのために、当対象地区の南に隣接するレ・アール地区の都市組織図(フランスワーズ・ブドンらの研究において手書き作成されたもの)を、オスマン大改造の直前と直後の状態についてGISデータ化した。これにより、セーヌ川からグラン・ブルヴァールまでのパリの拡張過程が図化されたことになる。

オスマンのパリ大改造では、開設道路を「サーキュレーション」として機能させ、既存の都市組織を活性化することが目指された。その核となったのは、開設道路によるパリ市の大十字路(グラン・クロワゼ)と環状ブルヴァールの形成、駅(北駅と東駅)との連結であった。

期間[1]では、オスマン大改造の最初の開設道路としてセバストポール大通り(Boulevard Sébastopol)が開設され、大十字路(グラン・クロワゼ)の南北軸(カルド)を形成した。本研究では、このセバストポール大通り、ならびに交錯するチュルビゴ通り(Rue de Turbigo)の開設に伴って中世の稠密な街区がロテスマン(土地区画整理)されていく過程を明らかにした。

期間[2]では、オスマン失脚(1870年)から世界大戦期に引き継がれて開設された道路 — レオミュール通り(Rue Réaumur)、オスマン計画道路ではないがエティエンヌ・マルセル通り(Rue Étienne Marcel) — が、環状ブルヴァールのバイパスとして開設されている事を示した。そして、その開設事業を通じた都市組織再編に加え、そこから派生するデュスブ通り(Rue Dussoubs)やルーヴル通り(Rue du Louvre)の開設事業の詳細を分析した。

なお、こうした研究に際しては、国立古文書館、パリ市役所地籍課を中心に、地籍図(cadastre)、土地収用・売買関連資料ならびにその公証人記録を一次資料として収集した。また、個々の地割の中でどのように建築物が構築され都市組織に適應されていったかを、パリ市古文書館所蔵の建築許可申請書に基づき分析した。

このパリ大改造は、パリのみならずフランスの地方都市や海外の諸都市においても「オスマニゼーション(Haussmannisation)」として多大な影響を与えている。今後は、パリ郊外も含むより広範囲での展開(現在のテラス・デファンス計画[市域拡張]や協議整備区域ZACでのラ・フランス大通り計画[都市内改造]など)も視野に入れつつ調査を実施する計画である。